

学術論文

保育記録の方法についての一考察： 保育記録と保育者の主体性との関係

富貴田 智子

Consideration for Methods of Childhood Education Records :
The Relationship between Records and Educators' Independence

FUKITA Tomoko

はじめに

ショーンが提唱した「省察的实践家」という専門家についての概念がある。これは、明確な専門スキルをもって問題解決にあたる、科学的で実証的な技術的熟達者こそが専門家であるとされた、それまでの専門家論に対する疑問から確立されたものである。しかし、人が生きていく中で生じる問題の多くは原因が不明瞭かつ不確実であり、その問題を捉える者がどこに注意を向けるかによって解はさまざまである。そこでショーンは、この要因が不明瞭、不確実な問題に向き合うことが求められる教師、看護師、ソーシャルワーカーといった者を「行為の中で省察を重ねながらすべき行為を考える」専門家であると位置づけ、「省察的实践家」とした。この概念は、日々乳幼児を預かり、保育・教育を行う保育者にも該当するものである。

さて、省察とは何か。広辞苑には「自分のことをかえりみてよく考えること」とある。保育者に視点を定めて意味を落とし込むと、「自分が行ったその日の保育が子どもの育ちにとってどうだったのか振り返って考えること」となるであろう。保育の振り返りの重要性は多くの研究によりまとめられており（瀧川、2015；田島、2019；橋川、2016；山鹿ら、2020）、これらの研究からも振り返りをなくして保育という営みを継続させることは不可能と考えられる。また保育記録は、実践の当事者の振り返りに活用されるだけでなく、保育カンファレンスの資料として保育者集団としての振り返りにも有用であることが示されている（鯨岡、2013；島田ら、2020）。

一般的に日々の保育の振り返りは、個々の保育者が子どもの姿や自身の課題を言語化して書き留める、あるいは、写真やビデオなどの映像として残す保育記録によって行われることが多い。幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園保育・教育要領の中にも記録の重要性は謳われているが、保育記録には統一された方法があるわけではない。保育者は子どもが生活する中で生じる予測不能な問題に対応しなければならない専門家である。保育者自身が生じた問

題をどう捉えるのかによって記録される内容が異なるだろうし、そもそも保育者が何をもって問題とするのか、によっても記録内容は異なるだろう。今日の振り返りが明日の保育に生きるように、記録の方法もその保育者が活用しやすい方法があるのではないかと考える。つまり、何をどのように記録するのかは、いわば保育者の専門性に依拠しているといえる。保育記録に求められるべきは、その保育者が捉えた問題がよく分かり、解決の糸口が明瞭であることではないか。

記録について公表されている研究には、特定の記録方法を勧めたもの（河邊、2008；小山、2006）、ある程度の客観性と統一性が保たれなければならないことがまとめられたもの（小笠原、2019）、記録のデジタル化のためのシステム導入を述べたもの（山鹿ら、2020）がある。これらにはそれぞれ支持する方法論があるのだが、先述の通り、保育記録は記録する保育者の目的によって内容や方法は変わるものであると考える。そこで本研究では、現在多くの保育施設で使用されている記録法とその記録法を用いるメリットをまとめ、記録が実践に最大限に活用されるための考察を試みる。なお本研究では、実践の振り返りに論点を置くものであることから、時点を定めて書かれる幼児指導要録や抄本等といった記録は省くものとする。

1 現在使用されている代表的な保育記録の概要

保育現場において書かれている保育記録の方法は多岐に渡る。それらは主に次の5つの方法に分類される。その日の保育を時系列や項目別で記録する経過記録、対象児や状況を定めて一定時間の様子を記録する観察記録、保育の中で生じる事象を記録するエピソード記録、エピソード記録をさらに展開させたエピソード記述（鯨岡、2005）保育環境に重点を置いたうえで展開される子どもの活動を記録する保育マップ（河邊、2005）の5つである。以下にそれぞれの概要を述べる。

(1) 経過記録

経過記録は、医療や福祉の現場でも活用されている方法である。「経過」を記録するものであるので、「Aという状態がBという状態になった」ことがわかるように具体的に記されるものである。保育現場では、その日の保育を時系列、あるいは「友だち関係」「食事・排泄」といった項目ごとに簡潔にまとめる記録法である。クラス集団であっても個人であっても記録は可能だが、いつ、誰が、どこで、何をしていたのか、どのような変化が見られたのかといった事実を正確に記録することが求められる。事実の記載が重要なので、記録者は必ずしもその子どもやクラスを保育している当事者である必要はない。ただし、誰が見ても等しい情報が得られるような客観性が保たれていなければならない。

(2) 観察記録

特に配慮を要する子ども、何らかの理由で保育者が着目している子どもや状況に視点を絞っ

て記録する方法である。保育者が観察した事実をまとめるという点では(1)の経過記録と類するが、観察記録はある対象に限定するものである点が経過記録とは異なる。文章や箇条書きで記録されることが一般的だが、例えば「給食中の離席」というような状況に限定されているならば、言葉だけでなく離席回数や離席から着席までの時間、そこから導かれる給食中離席した合計時間を記録することでより具体的な資料となる。

観察記録もまた事実を丁寧に記載するものであるので、実践当事者以外の者が記録することが可能である。

(3) エピソード記録

子どもが生活する様子をエピソードとして記録するものである。(1)(2)が観察した事実を忠実に書くことが求められることとは異なり、エピソード記録は、記録者となる保育者の思いや読み取りも含まれる。例えば「Aくんが笑った」という事実を、「Aくんが喜びを爆発させるように本当に嬉しそうに笑った」(下線部が保育者の読み取り)と記録するという具合である。記録者が感じた子どもの様子として記録されるものであるので、エピソード記録は、保育を实践した当事者が記録するものとなる。

(4) エピソード記述

エピソード記録と混同されやすい記録方法にエピソード記述(鯨岡、2005)がある。観察した事実を正確に記録することが求められていたこれまでの記録の仕方では困難だった、実践された保育を保育者が主体となって考える機会を保障する方法として提唱された、保育記録のひとつのあり方である。エピソード記述は、単純にエピソードのみが記録されるものではなく、そのエピソードが生じた「背景」と、エピソードについて記録者である保育者がどう考えるのかを述べた「考察」が含まれなければならない。エピソードが生じた意味を保育者自身が追求しまとめたものがエピソード記述と言える。この記録の性質上、記録者は必ず実践当事者でなければならない。

(5) 保育マップ

保育マップ(河邊、2005)は、これまでの記録法とはずいぶん様相が異なり、保育を環境面から捉えようとする記録法である。まず保育環境図があり、そこに子どもの遊びの展開が記述される(図1)。例えば、河邊(2008)では具体的に次の6点を必要な視点と述べている。①各インフォーマルグループの遊びの経過を可能な範囲で持続的に注視すること、②それぞれの遊びの関係性を空間俯瞰的に視野に入れていること、③幼児の言動から「遊びのどこに面白さを感じているか」「何を体験しているのか」など志向性を読み取ろうとしていること、④その際「他者との人間関係」「モノを含んだ空間との関係」を視点にしていること、⑤幼児の志向性の延長線上に「次に必要な景観は何か」を読み取ろうとしていること(=保育者の願い)、

⑥「願い」に向けての具体的援助の可能性を示していること、の6点である。

保育者の今後の対応を考えて記載するものでもあるので、記録者はやはり実践当事者である必要がある。

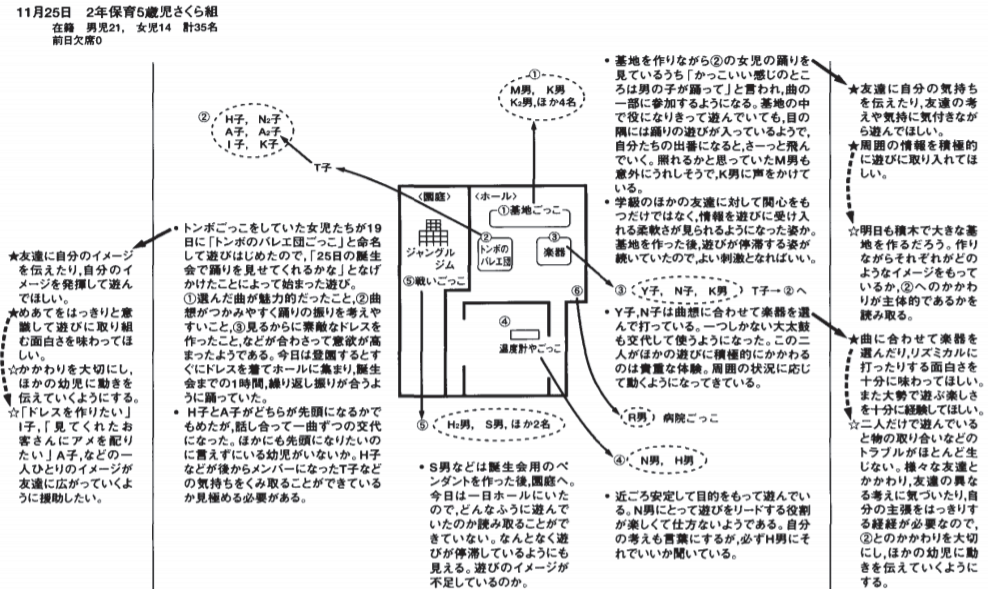


図1 保育マップの例 (2008、河邊より転載)

2 それぞれの記録法のメリット

概観したように記録の方法については様々であり、それぞれの記録法には、書くことで得られる多くのメリットがある。保育者がいずれかの記録法を選択するためには、それぞれのメリットが理解されていなければならない。以下に各記録法のメリットをまとめる。

(1) 経過記録

クラス集団を対象とする記録と、一人の子どもを対象とする記録がある。クラス集団を対象とする経過記録の場合、時間も記入することで、ひとつの遊びや活動に必要な時間が認識できる。すると保育者自身が時間の見通しをもつことが可能となる。これは日案作成の際には必ず必要な要素であり、経過記録のメリットのひとつと言える。

子ども個人を対象とした経過記録の場合は、園の方針に沿って統一した項目を設定することで、乳児から幼児を横断的に見ることを可能にする。これはその園で過ごす数年間、子どもたちがどのように育ち就学を迎えるのかを整理する材料になるだろう。また、一人の子どもを追って記録を取り続けられれば縦断的に見ることも可能となり、ポートフォリオ等の子どもの育ちの軌跡についての資料を作成することができる。

(2) 観察記録

その対象の何について記録するのが明白であるので、観察する視点と記録する内容が整理されやすくなる。「Bくんは些細なことで友だちに手が出てしまう」という姿が気になって観察記録をとるのであれば、Bくんの友だち関係や情緒といった点に着目してBくんを観察し、その結果を事実に基づいて記録することができる。

観察記録は事実を書き留めることが重要であるので、必ずしも実践者が記録する必要はない。クラス担任のように主に保育を行う保育者以外、例えば園長や主任がその子どもの様子を観察して記録に残すことも可能である。これは、ある姿や状況を問題だと捉えている保育者以外の目で子どもを見ることを可能にするので、一人の子どもを多面的に捉えることにつながる。また、複数の保育者が同時に子どもの情報を共有することができる、という副次的なメリットがあると考えられる。

(3) エピソード記録

エピソードとはそもそも「挿話」であるので、保育の中のちょっとした出来事を書き留めることで記録になりうる。その点では初学者や保育経験の浅いものでも気負うことなく取り組むことができそうである。日々繰り返される保育の中の、何をもって「ちょっとした出来事」とするのか、何を取り出すのかは実践した保育者次第であり、その時に何に注目していたのかが後に見えてくる面白さがある。

保育者が子どもの姿についてのエピソードをもつことの重要性に気づかされる場面が保育現場ではいくつもある。登降園の際、保護者に一言添えるという行為も、エピソードを伝えることで子どもの園生活を生き生きと伝えることができよう。事実のみよりも、そこに保育者の思いが見える方が保護者は安心することは容易に想像できる。同様に、園だよりやクラスだよりの作成においても、エピソードを意識することは園生活を保護者により伝えやすくする点で力を発揮することが予想される。

(4) エピソード記述

エピソード本体に、エピソードの背景、エピソードについての考察が加わることで、エピソードが「挿話」に留まらず、取り上げられた子どもの生きている様相が浮かび上がる。背景にはエピソードをより解釈しやすくさせる情報があり、考察にはエピソードとなった必然性や、その子どものこれからの育ち、保育者がすべき援助などがまとめられる。考察には保育者自身の保育観や子ども観が無意識のうちに込められることになり、振り返りの材料として十分であると考えられる。また、園の保育者がそれぞれのエピソード記述を持ち寄って研修を行うことで、園として大切にしたい保育の視点や援助が浮かび上がることも可能となるだろう。近年、エピソード記述を用いた園内研修やカンファレンスが活発に行われている報告が多数あり（青木、2016；岡花ら、2009；仲、2017）、エピソード記述は園としての保育の振り返りにも有効であ

ることが立証されている。

(5) 保育マップ

2018年に改訂された幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領では、「子どもの主体性」や「環境を通した保育」が強調されている。保育環境図に子どもの姿と保育者の願いが記述された保育マップは、現在の保育のあり方に即した記録法と言えるだろう。その日の保育環境下での子どもを記録していくことになるので、保育者の目は自然に全体に向けられる。自分が行った保育について環境を通して俯瞰してみる姿勢は、子どもと環境と遊びを関連付けて考える姿勢につながり（河邊、2008）、環境設定を含めた明日の保育計画を同時に考えることも可能にするものであると考えられる。

考察

現在一般的に取り組まれている記録法を5つ挙げ、それぞれの概要とメリット、記録内容と記録者との関係性をまとめた（表1）。それをふまえ、保育記録のあり方について考察したい。

先述のように、保育記録は保育の振り返りの主たる資料である。振り返りは、基本的には日々保育を実践した者が個人で行うものであるが、保育の質を高めるうえでは個人だけではなく、園全体で行うことも重要である。従って、記録は常に誰が読んでも同一の情報となるよう、具体的に丁寧に書かれていなければならない。

記録は、実践者の保育と子どもの育ちが書かれるものなので、それらが満たされていれば記録法は必ずしもこれでなければならない、ということはないのではないだろうか。もちろん、園で「今年度の保育のテーマに沿って記録をする」というような目標が設定されているのであれば、園内において記録法が統一されていた方が整理しやすいだろう。それ以外の場合には、必ずしも記録法が統一されていなければならない必要性はないのではないだろうか。

複数ある記録法から何を選択するか、ここには保育者の主体性が問われる。自分自身が子どもの何を見たいのか、何を問題視するのか、今後の保育をどう実践したいのか。それによって採用する記録法は異なるのである。一人の子どもを家庭環境も含めてじっくり掘り下げたい、と思うのであれば「エピソード記述」が妥当だろうし、子どもの遊びにあった環境や遊びの展開について検討したいのであれば「保育マップ」が適しているだろう。実践者が自身の保育をどうしたいのが最も明確になる記録法を採用することが重要であると言える。

一方で、実習生や経験の浅い保育者からは、記録法を選択するどころか、記録そのものを書くことが苦手だという声をよく聞く。それは自身の視点が定まらないまま、とにかく紙面を埋めようとしてしまうからである。この問題は指導者にあたる者がそれぞれの記録法のメリットを把握する、記録項目を整理することをした上で、適切な記録法を提示し指導することで解消されるのではないだろうか。例えば、記録する項目を選定し、その項目が意味するものが理解できれば、視点が定まると考える。記録の項目に当たる、保育の見方や捉え方が明確になれば、

記録に頭を悩ませることは減るだろう。また、記録された内容へは指導者がコメントする等のフィードバックも欠かせない。記録は園長などがポジティブなフィードバックをすることで楽しく書くことができるようになり（大豆生田・おおえだ、2019）、振り返りの資料が確保されることへつながる。

ではどのような記録法や項目を選択するか。ここには、「園の主体性」が問われる。園の責任者が、自園をどうしたいのか、保育者をどう育てたいのかが明瞭でないと、既存の様式に従って紙面を埋める（埋める努力をする）といった機械的な事務作業を強いるのみになってしまう。園の方針や子ども観、保育観にあった記録法や項目をいつも頭において、記録と矛盾がないように書き進められるような配慮が、責任者には必要になると考える。

保育記録は、保育の振り返りのための貴重な資料となる文書である。目の前の子どもの姿を通して保育の見直しを行う一つの材料であるが、目に映った姿を単純にそして受動的に言語化するのではなく、子どもの姿に現れる多くの情報を、子どもから積極的に手に入れようとする姿勢、得られた情報を自身の保育に活用しようとする姿勢こそ、記録に求められる重要な「保育者の主体性」であろう。

表1 保育記録の方法と概要・メリット・記録者との関係性

記録法	概要	メリット	記録と記録者との関係性
経過記録	・一日を事実に従って時系列、項目別で記す	・一つの活動や遊びに必要な時間が認識できる ・保育者全員が情報共有しやすい ・誰でも記録可能	関係性は問わない
観察記録	・対象を限定して記す ・事実に従って記す	・記録する目的が明確 ・誰でも記録可能 ・担任以外の職員が記録者となることで複数の保育者がその子を知るきっかけとなりうる	
エピソード記録	・記録者の思いや読み取ったことを含めてエピソードとして記す	・記録者の関心の対象が認識できる ・保護者対応に活用できる	実践当事者
エピソード記述 (鯨岡、2005)	・エピソードに加え背景、考察を記す	・エピソードを深く掘り下げ考えることが可能	
保育マップ (河邊、2005)	・保育環境図に加え子どもの姿、保育者の願いを記す ・保育内容を俯瞰して記す	・子どもと環境を関連させて考えることが可能	

文献

(1) 青木一永. (2016). 保育実践現場における乳幼児理解の向上に関する研究：エピソード記述への取り組みを通して. 大阪総合保育大学紀要、10、pp159-180.

(2) 岡花祈一郎・杉村伸一郎・財満由美子・松本信吾・林よし恵・上松由美子・落合さゆり・山元隆春. (2009). 「エピソード記述」による保育実践の省察：保育の質を高めるための実践記録と保育カンファレンスの検討. 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要、37、pp229-237.

(3) 小笠原明子. (2019). 保育記録の分析にかかる研究の動向と展望. こども学研究、1、p29-38.

(4) 河邊貴子. (2005). 遊びを中心とした保育：保育記録から読み解く「援助」と「展開」. 萌文書林.

- (5) 河邊貴子. (2008). 明日の保育の構想につながる記録のあり方:「保育マップ型記録」の有用性. 保育学研究、46、(2)、pp109-120.
- (6) 鯨岡峻. (2005). エピソード記述入門:実践と質的研究のために. 東京大学出版会.
- (7) 鯨岡峻. (2013). 子どもの心の育ちをエピソードで描く:自己肯定感を育てる保育のために. ミネルヴァ書房.
- (8) 島田知和・阿南寿美子・田中洋. (2020). 保育カンファレンスにおける保育記録の活用のあり方. 別府大学短期大学部幼児・児童教育研究センターレポート、39、pp.24-29.
- (9) 清水志穂・吉原寿子・清水良彦・永田誠. (2019). 写真を活用した記録に基づく保育の充実に関する考察: 幼児の主体的な活動を支える保育を目指して. 大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、37、pp35-50.
- (10) 瀧川光治. (2015). 写真を活用した保育の振り返りと園内研修の手法の提案:アクティブラーニング型園内研修の一つとして. 大阪総合保育大学紀要、10、pp287-297.
- (11) 田島大輔. (2019). 保育における振り返りのプロセスについての一考察:子ども理解・対話・可視化に着目して. 秋草学園短期大学紀要、36、pp166-175.
- (12) 仲真人. (2017). 新潟青陵幼稚園における園内研修:エピソード記述を用いた園内研修の事例報告. 新潟青陵大学短期大学部研究報告、47、pp153-164.
- (13) 橋川喜美代. (2016). 保育記録による園内研修と保育への振り返り:選抜研修がもたらす保育者への変容と園内への学びの広がり. 兵庫教育大学研究紀要、49、pp9-18.
- (14) 山鹿高明・佐々木淳・井上孝之・上村裕樹・音山若穂. (2020). 保育施設における効率的保育記録システムの開発. 情報処理学会第82回大会抄録、p51-52.